

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13441

研究課題名(和文)ドイツ語移動動詞と経路表現の共起に関するコーパスを用いた意味的・統語的分析

研究課題名(英文) A corpus-based semantic-syntactic analysis of the co-occurrence of motion verbs and path expressions in German

研究代表者

高橋 美穂 (Takahashi, Miho)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師

研究者番号：40787610

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、ドイツ語移動動詞と経路表現との共起関係を実証的に明らかにする試みである。移動を表す基礎動詞のみならず、特定の経路を語彙化した不変化詞動詞をも対象とし、具体的な経路表現との共起、共起可能な経路表現の組み合わせを究明した。「通過点」を語彙化した不変化詞動詞における意味解釈の分化、「起点」と「着点」の非対称性、自由与格や受動などの態交替における移動動詞の振る舞いと経路表現との関連性を探り、移動をアスペクト的に限定し得る経路表現が文の意味解釈や成立可否に大きく寄与することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ語移動動詞と経路表現との共起関係について、大規模コーパスを用いて調査・分析することで、先行研究では見過ごされていた言語事実を明らかにした。さらに、経路概念の表出と移動事象のアスペクトとの連関を究明したことで、文の意味解釈とアスペクトとの相関性に光を当てた。実証研究における成果を理論研究へ還元することを試みることで、新たな知見をもたらし、実証研究と理論研究の融合というアプローチに寄与した。

研究成果の概要(英文)：This research project empirically examined the co-occurrences of German motion verbs and path expressions. Targeting not only base verbs that express types of motion but also particle verbs that lexicalize motion paths, this study investigated their co-occurrence with specific path expressions and the possible combinations of path expressions. Differentiation of the meanings of particle verbs that lexicalize PATH (transit point), asymmetries of SOURCE and GOAL, and the behavior of motion verbs and the relevance of path expressions in diathesis alternations (e.g., free datives and passives) were examined, showing that path expressions that serve to indicate the aspect of motion events contribute relevantly to the interpretation of sentences and constraints on possible sentence constructions.

研究分野：言語学、ドイツ語学

キーワード：ドイツ語 移動動詞 不変化詞動詞 経路表現 アスペクト 事象構造 コーパス 語彙意味論

## 1. 研究開始当初の背景

ドイツ語は Talmy (2000)の移動表現の類型によるところの「付随要素枠付け言語」に属し、移動の経路が動詞本体ではなく、主として前置詞や不変化詞といった動詞の付随要素によって表される。ドイツ語学の分野では、とりわけ語場やヴァレンツの理論に依る研究において、量的・質的に豊富なドイツ語の移動動詞を体系的に記述することが試みられてきた。他方で、ある移動動詞が具体的に起点・着点・通過点のうちいずれの経路表現と結び付きやすいか、あるいはこれらの経路表現がどのような組み合わせで移動動詞文に出現するのかを問題とした実証研究は、どちらかと言えば散逸的に試みられてきたに留まる。また、従来の体系的な記述研究で取り上げられてきたのは、もっぱら移動を表す基礎動詞のみであり、経路の語彙化に関わる不変化詞を伴う不変化詞動詞は分析の射程に収められていない。移動の不変化詞動詞に関する分析としては、Olsen による語彙意味論に立脚した理論研究があるが(Olsen 1997 など)、Olsen の分析を支えるデータは主に内省に基づくものである。

これらの先行研究における動向に鑑みて、ドイツ語移動動詞と経路表現の共起に関する大規模コーパスを用いた実証的データの提供が待たれるところであり、なかでも、移動を表す基礎動詞のみならず、特定の経路を含意する不変化詞動詞をも対象とし、経路概念の言語化を問うアプローチが求められると考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究課題では、移動事象の言語化、とくに移動を枠付ける経路の概念がどのように表出されるのかを、大規模コーパスの事例に基づき究明することとした。移動を表す基礎動詞のみならず、特定の経路を含意する不変化詞動詞をも対象とし、具体的な経路表現との共起頻度・共起可能な経路表現の組み合わせを問題とすることで、移動事象をアスペクティックに限定し得る経路表現の言語化に関わる意味的・統語的制限を明らかにすることを目指した。

研究代表者はすでにそれまでの研究において、動詞の語彙的意味がその動詞が用いられる構文の可否や解釈とどのように関連するかという観点から、ドイツ語の移動動詞が様々な構文で用いられる場合を取り上げ、調査・分析を行ってきた。本研究課題では、移動動詞の語彙的意味によって求められる項である経路表現に焦点を当て、経路表現の有無およびその内実と移動動詞文(構文)の意味との関連性を問うこととした。コーパス事例調査に基づいて、経路概念の表出と移動事象のアスペクティック解釈、さらには構文の意味がどのように連関するかを明らかにすることにより、経験的データの理論への還元を試みた。

## 3. 研究の方法

本研究課題のコーパス事例調査は、移動動詞(基礎動詞)と経路表現との共起に関する調査(調査1)および不変化詞動詞と経路表現との共起に関する調査(調査2)に分けて実施した。事例調査にあたっては、ドイツ語研究所によってオンラインで公開されている大規模コーパス DeReKo (Das Deutsche Referenzkorpus) を活用した。

2. で述べた研究目的のもと、具体的には主に次の3つの観点からアプローチを進めた。

### (1) durch を伴う不変化詞動詞における意味解釈の分化

移動の通過点を含意する durch を伴う不変化詞動詞では、「~を通り過ぎる」という空間的意味と並び、「~(移動)し続ける」という時間的意味が認められる。コーパス事例調査に基づき、両解釈の分化のメカニズムを明らかにする。

### (2) 起点ないし着点の表出とその非対称性

移動の起点と着点については、Ikegami (1987)においてその言語化に関わる非対称性 起点が有標な表示である一方で、着点は無標な表示である が指摘されている。とくに移動動詞 fahren と fahren を基礎動詞とする不変化詞動詞を対象に、起点と着点の表出の実態を調査し、両者の非対称性がどのような点で認められるのかを探る。

### (3) 広義の態交替における移動動詞の振り舞いと経路表現との関連

動詞のヴァレンス拡大現象である「自由な」与格構文、受動構文の一種とされる bekommen + 過去分詞構文(bekommen 受動文)では、それぞれの構文の本来の意味と並び、使役に通じる読みが可能となる場合がある。そのような構文の副次的な意味が得られる条件を、とくに経路表現との関わりから明らかにする。

研究実施期間のうち、最初の2年間は研究の基盤を構築するための時期とし、予備調査の再検討、および事例データの収集・分析を集中的に行った。調査の過程で得られた研究成果については、学会や研究会で口頭研究発表の形で披露し、学術誌への論文投稿へと繋げた。研究者コミュニティの中で本研究の意義を共有するとともに、常にフィードバックを得ながら研究を進めることで、問題点や課題の早期の洗い出し、並びに考察を深めることに努めた。最終年度は研究の総括と成果発表の時期と位置付け、成果の取りまとめを行うとともに、学会や研究会等で積極的に発表を行った。

#### 4. 研究成果

上記の3. で述べた(1)~(3)の観点について、主要な研究成果は次のようにまとめられる。

(1) コーパス事例調査の結果、durch を伴う不変化詞動詞における異なる2つの意味解釈「空間的意味と時間的意味」は文中に共起する経路表現と密接に関わることが明らかとなった。「~を通り過ぎる」という空間的意味の場合には通過点との共起が観察される一方で、「~(移動)し続ける」という時間的意味では移動の着点との共起が認められる。このように両意味解釈では、文中に共起可能な経路表現が相補分布を成している。事例調査からは同時に、空間的意味と時間的意味では表される移動事象のアスペクトが異なることが示された。空間的意味では限界的な移動が表される一方で、時間的意味では非限界的な移動が表される。この観察から示唆されることとして、移動の通過点と直結した空間的意味では「1回きりの通過」が表される。他方で、時間的意味で表される移動は連続して起こる「通過の集積」として捉えられる。以上の結果を受けて、両意味解釈を事象構造(event structure)の枠組みで定式化し、時間的意味が場所の「通過」という空間的解釈に還元されることを示した。また、そのような空間的解釈から時間的解釈への派生を可能とする背後には、durchによる「通過」の意味によってもたらされる、空間と時間との1対1の対応関係・並行性があることを論じた。先行研究において、時間に関わる概念・表現の基底には空間の概念・表現体系があるとされることがあるが(例えば Wunderlich 1985)、本研究成果はその派生の一つの原理を究明したケーススタディーとして位置付けられる。

(2) 事例調査では、基礎動詞 fahren、起点を内包する不変化詞動詞 ausfahren および着点を内包する不変化詞動詞 einfahren と並び、いわゆる「二重不変化詞動詞」(McIntyre 2001)である hinausfahren および hinein fahren を分析対象とし、経路表現との共起関係を探った。調査からは、主として次のことが明らかとなった。まず、基礎動詞 fahren については、着点と高頻度で共起する一方で、起点との共起頻度が極めて低いことが確認された。次に、einfahren および hinein fahren では着点と共起する傾向が顕著であるという結果が得られた。起点を内包する ausfahren では起点と共起する傾向があるものの、その頻度は着点を内包する不変化詞動詞と着点との共起頻度と比べて低い。ausfahren 同様に起点を内包する hinausfahren では、起点ではなくむしろ着点と共起する傾向が認められた。事例調査と分析の結果からは同時に、起点と着点の表出のされ方が、新情報・旧情報という情報構造の点で対照的な特徴を示すことが明らかとなった。具体的には、動詞の語彙的意味に基づいて起点ないし着点が問題となる環境で、着点は実際に当該文中で新情報として提示されるのに対して、起点は旧情報として認識されやすい。この結果は、Ikegami (1987)で指摘されるような人間の言語・認知的な着点志向を裏付けるものであると考えられる。

(3) 自由与格構文は主として与格が事態から影響を被るという「被動」を表すものであるが、特定の環境下で与格が事態を意図せず引き起こすという「非意図的使役」の解釈が得られることが知られている。他方 bekommen + 過去分詞構文では、本来的な「受動」の意味(「~してもらい・される」)と並び、事態を主語自身が成し遂げる「達成」読み(「~することができた」)が可能となる場合がある。調査と分析の結果、移動動詞が用いられる自由与格構文および bekommen + 過去分詞構文で可能となる解釈は、経路表現によってもたらされる移動のダイクシスに基づき、予測が可能であることが明らかとなった。具体的には、移動動詞の自由与格構文で「非意図的使役」解釈が認められるのは、「こちらからあちらへ」という遠心的移動が表される場合に限定される。その一方、移動動詞の bekommen + 過去分詞構文で「達成」読みを阻むのは、「あちらからこちらへ」という求心的移動であることが示された。

以上、本研究課題では、移動動詞と経路表現との共起関係を実証的に調査・分析することで、先行研究では見過ごされていた言語事実を明らかにした。さらに、実証研究と理論研究の融合を図りながら、移動動詞の項である経路表現の内実と構文現象との連関を示した。

#### <引用文献>

- Ikegami, Yoshihiko (1987): 'Source' vs. 'Goal': A case of linguistic dissymmetry. In: Dirven, R./ Radden, G. (eds.) *Concepts of Case*. G. Narr, 122-146.
- McIntyre, Andrew (2001): *German Double Particles as Preverbs: Morphology and Conceptual Semantics*. Stauffenburg.
- Olsen, Susan (1997): „Zur Kategorie Verbpartikel“. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 119, 1-32.
- Talmy, Leonard (2000): *Toward a Cognitive Semantics, vol. 2, Typology and Process in Concept Structuring*. MIT Press.
- Wunderlich, Dieter (1985): Raum, Zeit und das Lexikon. In: Schweizer, H. (ed.) *Sprache und Raum: Psychologische und linguistische Aspekte der Aneignung und Verarbeitung von Räumlichkeit. Ein Arbeitsbuch für das Lehren von Forschung*. Metzler, 66-89.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Miho Takahashi	4. 巻 2
2. 論文標題 Passivisch oder modal? Eine semantische Analyse ueber die Lesarten der Konstruktion bekommen plus Partizip II	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Linguisten-Seminar: Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung	6. 最初と最後の頁 43-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.11282/jgglis.2.0_43">https://doi.org/10.11282/jgglis.2.0_43</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miho Takahashi	4. 巻 1
2. 論文標題 Temporalitaet als Ableitung aus einer Raeumlichkeit: Eine Fallstudie ueber die wegbezogene und die temporale Lesart beim Partikelverb durchfahren	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Linguisten-Seminar: Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung	6. 最初と最後の頁 56-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.11282/jgglis.1.0_56">https://doi.org/10.11282/jgglis.1.0_56</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美穂	4. 巻 42
2. 論文標題 移動を表す不変化詞動詞における起点・着点の表出 ausfahren, einfahrenを例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Der Keim	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.15026/93490">https://doi.org/10.15026/93490</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美穂	4. 巻 5
2. 論文標題 ドイツ語自由与格構文における「使役」と「被害」の意味 英語のhave使役文・日本語の「させ」使役文と対比して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miho Takahashi	4. 巻 45(4)
2. 論文標題 "Affiziertheit" und "unabsichtliche Kausierung": Lesarten der Dativkonstruktionen bei Bewegungs- und Zustandsveraenderungsverben	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Deutsche Sprache - Zeitschrift fuer Theorie, Praxis, Dokumentation	6. 最初と最後の頁 362-377
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Miho Takahashi
2. 発表標題 Zur sprachlichen Asymmetrie von "Ursprung" und "Ziel" einer Fortbewegung: Am Beispiel der Partikelverben mit fahren
3. 学会等名 日本独文学会第47回語学ゼミナール (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miho Takahashi
2. 発表標題 Ueber die Ambiguitaet zwischen "Kausierung" und "Involviertheit": Ein deutsch-japanischer Vergleich
3. 学会等名 アジア・ゲルマニスト会議2019札幌大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋美穂
2. 発表標題 「使役」と「被害」が重なる構文 自由与格・have使役・「させ」使役の比較
3. 学会等名 ドイツ言語理論研究会 (GLT)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋美穂
2. 発表標題 「使役」と「被害」の意味の重なり ドイツ語自由与格構文と日本語「させ」使役文の比較
3. 学会等名 ワークショップ：構文の使用と意味（於：東北大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋美穂
2. 発表標題 空間的解釈から派生される時間的解釈 durchを伴う移動の不変化詞動詞を例に
3. 学会等名 日本独文学会2018年秋季研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miho Takahashi
2. 発表標題 Konstruktionen mit bekommen plus Partizip II bei Fortbewegungsverben: Zum potenziellen Dativ als "Verursacher" des Sachverhaltes
3. 学会等名 日本独文学会第46回語学ゼミナール（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋美穂
2. 発表標題 「モノの所在」に基づく意味の創発 ドイツ語移動動詞の自由与格構文の解釈
3. 学会等名 「所有」 文法・意味・状況の動態論（東京外国語大学語学研究所ワークショップ）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miho Takahashi
2. 発表標題 Zum Partikelverb durchfahren: konzeptuelle Erschliessung der Lesarten von "Durchquerung" und "andauernder Fahrt"
3. 学会等名 日本独文学会第45回語学ゼミナール (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miho Takahashi
2. 発表標題 Ueber Partikelverben mit "fahren". Eine Korpus-Untersuchung zur Kombinatorik der Partikelverben der Fortbewegung mit direktionalen Wegargumenten
3. 学会等名 Abteilungskolloquium der germanistischen Linguistik (Eberhard Karls Universitaet Tuebingen, Germany)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----